

2023年10月14日(土)

老球の細道756号

実録「仁義なき腰痛との戦い」PART4

会津バスケットボール協会 室井 富仁

私は35歳の時に右アキレス腱を断裂したことがある。10月2日福島市の旧福島県営体育館で行われた福島選手権大会のゲーム中であった。翌日会津若松市の竹田病院で手術が行われた。入院したくなかったので部分麻酔で手術を受け、その日に家に帰って来た。

自宅に帰って来たのは良かったが、手術後麻酔のさめた後、あまりの痛さに3日分の痛み止めの薬を1日で飲み切ってしまった。その時のトラウマが今でも残っており、今回の脊柱管手術後の痛みに対しては、私なりの覚悟を準備していた。(家族から大げさだと嘲笑)。

手術後の翌日、夜中から何度も目が覚め、ほとんど眠れず朝を迎えた。眠れなかった原因は痛みではなく、尿管装着による違和感だった。今回の手術で最も苦しんだ試練である。

朝6時に看護師が検診に来て体温、血圧、酸素飽和濃度を計り、異状がないことを確認した。7時に朝食を食べて、調法された薬を5種類くらい飲まされた。入院前から相当のトレーニングをしていたので、すぐに立ち上がって歩くことができた。そのために午前中に尿管をはずすことができ、入院中の「3つのハーキュリーチョイス(困難の選択)管」の1つが解決した。尿管を外す時はものすごく痛い聞いていたが、背中ブロック注射の時の痛みと同じで一瞬だった。これでスッキリと小便ができる。極限時には、こんなことが幸せのひとつになるものである。しかし、安堵するは束の間、試練は次から次へとやってくる。

私の身体には、さらにもう2つの管が繋がれている。点滴と手術後の腰の出血を体外に排出させる管である。この管が身体から外れたりすると、もう一度手術のやり直しをしなければならないので、トイレに行くときは必ずナースコールをして看護師に付き添ってもらなければならない。点滴をしているせいかトイレが近く、その度にナースコールをして看護師さんと呼ばなければならない。ストレスがまた一段と高まった。幸せは手術後の痛みがいまだにないことだった。

午後から突然体温が上昇した。38.4度、パニックになり、血圧も180まで上昇。医師に聞いたら、手術後は身体の反応として想定内だという。クーラーの充分効いている病室で寝ているのに、身体が妙に汗ばんでいる。私がいかに気にするものだから、看護師が解熱剤を持ってきてくれて飲んだら36.7度まで下がり、ひと安心。TVで孫と一緒に見たお笑い芸人の言葉「ちっちゃなことは気にするな！ワカチコ、ワカチコ」を思い出した。

手術翌日からリハビリに励み、できるだけ短期間で退院しようと張り切っていたのだが、医師から熱が上がったのでリハビリはお休みという指示が出た。たった2日間であるが、ただベッドに寝て横になっている生活は試練の苦痛だった。家から持ち込んだ『徳川家康』をひたすら読んで空虚な時間を埋めた。試練の時に思い出すのはいつも名言、箴言である。

徳川家康不朽の名言「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。……」。心にスーッとしみこんだ。〈もう少し続きます〉